

宮古島での未来のふるさとづくりプロジェクトの提案

「こころの泉でつなぐ島づくりの輪」事業

本事業では、環境保全と一体化した地域活性化モデルを、宮古島に構築することを目標とします。

亜熱帯サンゴの島宮古島では、豊富な地下水脈に支えられた人々の暮らしと豊かな自然があります。しかし、近年この地下水脈の汚染や地下水を涵養する森林の減少が進みつつあります。また、地下水脈は海にもつながり、その汚染は富栄養化やサンゴを食害するオニヒトデの大量発生の原因になると考えられています。地下水保全は島全体の生態系を維持していく上で要になる取組みです。

本事業では、この地下水脈の保全を軸に、多様な分野をつなぐネットワークをつくり、人々が winwin の関係で持続的発展的に環境保全に取り組む仕組み作りを行ないます。

宮古島は隆起サンゴによって形成された島で、土壌の透水性が高く、雨水の大半が地下に浸透するという特性を持っています。そのため、島には池や川などはほとんどありません。島の生活用水や農業用水はすべて地下水に依存しています。

上記のように島全域が水源であることから、人々ひとりひとりの暮らし方がダイレクトに地下水脈の水質に反映することになります。とくに、島の大半の面積を占める農地や市街地などからの汚染負荷が大きいにも関わらず、地下水保全への島民の関心が高いとは言えない状況です。島全域が水源と言う事は、島全域を被う多様な分野のネットワークによって水源地を守らなければならないということです。中でも、島の大半を占める農地での地下水保全対策のネットワーク化が重要な課題となります。

本事業では、森林面積が少ない宮古島での植樹活動を進めることで、地下水涵養と同時に、生物多様性の保全に向けたエコロジカルネットワークの形成を進めます。

宮古島では、島を南北に走る幾筋もの嶺に沿って形成された樹林帯が残されています。これらの樹林帯が、野生生物の生息地の連続性を維持し、島の生態系を支える重要な要素として機能してきました。かつては、これらの樹林帯につながる無数の防風林がネットワーク上に農地の中に広がっていました。防風林のネットワークは、嶺の樹林帯をソースに多様な生物が島内に移動分散するための生態回廊（コリドー）として機能していました。しかし、農地の土地区画整理等によって、防風林の多くが伐採され姿を消しているのが現状です。森林面積の少ない宮古島においては、嶺の樹林帯の保全のみならず、防風林等の再生により、災害に強い島づくりや、生態系と生物多様性を保全する上での課題となっています。

本事業は、未来のふるさとを作る島の担い手の育成を行ないます。

宮古島は古くからの伝統や文化が今に伝わる島です。島の環境を守っていくためには、この島特有の自然や文化を十分に理解し、それらを活かした独創的な取組みやビジネスモデルを生み出していく人材の育成が必課題となります。小中学校では、地元の自然や文化への理解を深める学習を行ない、高校では研究や実践成果を社会に提案し実現させるための学習が必要となります。宮古総合実業高等学校などすでに研究実績のある学校もあり、これらの成果をいかにして実物大社会モデルに発展させるかが課題となっています。

若い人たちの島外への流出を抑え、島の経済の活性化を進めていくためには、起業家精神を持つ若者を育成していくことが必要です。そのためには、宮古島を愛し、この島の特色を熟知し、それらを活かした事業を興せる人材の育成が、島の主要産業である観光をはじめ様々な産業の発展には不可欠です。

「こころの泉でつなぐ島づくりプロジェクト」

本事業は、霞ヶ浦流域でNPO法人アサザ基金と企業が協働で行なっているwinwin型循環社会づくり事業をモデルに、多様な分野をつなぐネットワークの形成を宮古島で行ない、環境保全と地域活性化を一体化した事業を、宮古島の地域特性を活かした形で実現することをめざします。

「こころの泉でつなぐ」

沖縄学の父と言われる伊波普猷が残した言葉に「深く掘れ、己が胸中の泉。余所たよて水を汲まぬごとに」があります。偉大な先人の言葉は、今の宮古島にもそのまま当てはまります。実際に宮古島には古くから守られてきた泉（カー）が各地に在ります。これらの泉によって人々の暮らしは維持されてきたのです。泉は人々をつなぎ、人の輪を生み出してきました。今も、人々はそれらの泉を潤す地下水脈の上で暮らしています。

宮古島には余所にはない古い時代の文化や貴重な民俗が、人々の暮らしの中に地下水脈となって生きている島でもあります。それは、まさに己が胸中の泉を潤す水脈です。

ひとりひとりの心の中に泉を掘り起こし、すべての泉が地下水脈でつながっていることを多くの人々に伝え、多様な人々を結び付けながらこの事業を進めていきます。

具体的な事業の流れ

環境保全型農業のモデルづくり

地下水汚染の原因の多くを占めている農地からの肥料分（チッソ・リン）の負荷を防ぐために、宮古総合実業高等学校環境班が考案した「サトウキビと日本そばの輪作モデル」「バイオ・リンの活用モデル」を、島内の圃場で行ないます。

このモデルは、島の主要作物であるサトウキビの間作として、日本そばを栽培し、土壌中のチッソを作物に吸収させ回収するというものです。また、バイオ・リンの活用によって肥

料の吸収効率を高めることで肥料の投入量を抑えることができます。これらによって、地下水汚染の原因となる土壌中からのチッソの流出を抑えることが期待できます。

作業内容

サトウキビの無農薬栽培に挑戦。

植え付け、除草、収穫などを体験。

そばの栽培。

種まき、収穫、そば打ちなどを体験。

生物多様性調査。自然観察。

本事業による二酸化炭素削減効果・水質改善効果の調査（宮古実業高校）

緑のネットワーク（生態回廊・コリドー）づくり

樹木の拡大によって生物の生息地の拡大や移動拡散を助けることができ、島の生物多様性や生態系の保全に役立ちます。また、畑に防風林を復活させることで、災害に強い島づくりや、害虫を捕食する天敵を誘致することができ、無農薬での作物栽培を助けます。さらに、植樹はその土地の地下水涵養を促進します。

作業内容

防風林の復元

植樹、除草。

生物多様性調査。自然観察。

腐葉土づくり、有機肥料づくり等。

観光プログラムづくり

宮古島の自然や伝統文化を、環境保全など様々な体験をとおして、島全体のつながりの中で体感してもらえる観光モデルが求められています。企業であれば、社員家族の皆さんに、環境保全型農業や森づくり、地域との交流などを体験してもらい、皆さまのご意見を頂きながら未来の島づくりへの参加という新しいコンセプトの観光を一緒につくっていきたいと思います。

それらの成果を、最近増加している修学旅行などで活かしていくことが期待できます。

作業内容

遠方からボランティアで来て頂くので、短い時間の中で島の自然や文化を大きな繋がりとして実感して頂けるよう、参加者の感想や意見、提案などを活かして、毎回のイベントの内容を決めていきたいと思っています。

地域との交流

宮古島でもっとも古くからの伝統文化が残されていることで知られる池間島での民泊。

サトウキビやソバなどの栽培を島内で増え続けている耕作放棄地を再生して行なうことで、高齢化や人口流出が深刻化している同島の活性化にも寄与できます。

池間島では地元NPOによって全国的から注目されている先進的な福祉事業が行われています。池間小学校では、一昨年から飯島が環境を軸とした地域づくりの授業を行なっています。また、島内には、ラムサール条約指定の候補地である池間湿地があり、島の周囲には国内有数のサンゴ礁が広がっています。親子で安心して遊べる浜もあります。

池間島は、民俗学等によって以前から注目されている地域で、現在地元の人たちによって古い写真資料の収集・整理・保存の取り組みが行われています。このような地域住民による取り組みに対して企業の専門技術等をとおして貢献いただくことも可能です。

島の担い手づくり

環境保全型農業によって栽培を行なうサトウキビやソバなどの作物を、使った加工品等のブランドづくりへの参加。これらのブランドづくりの提案を、地元の高校生や小学生が学習をとおして行ないます。これらの生徒達の提案の実現に協力をお願いします。

作業内容

霞ヶ浦流域で行なっているせんべいづくり等のように、そばクッキーや黒糖などを手作りで行なう体験。

加工品作りの一部を、霞ヶ浦同様に、福祉作業所に依頼したいと思います。

生徒達の提案を聞いて頂き、意見交換など。

地元の協働体制

沖縄県立宮古総合実業高等学校 環境班

宮古島森林組合

美ぎ島宮古グリーンネット

宮古島観光協会

NPO法人いけま福祉支援センター

きゅーぬふから舎

地元小学校（数校予定）

NPO法人アサザ基金

2011年9月29日

NPO法人アサザ基金 代表理事 飯島 博